

## 〈学術研究集会傍聴記〉

## 第44回日本スポーツ心理学会 (Japanese Society of Sport Psychology 2017 44th Annual Conference) 学術大会での研究発表

山口 慎史\*

Shinji YAMAGUCHI

2017年11月24日から26日に大阪の大阪商業大学で開催された日本スポーツ心理学会に参加をした。この学会の学術大会は今回で44回目を迎え、心理学領域の学会では比較的歴史のある学会である。数多くある心理学会の中でも、日本スポーツ心理学会は、理論や概念を扱った基礎研究だけではなく、現場での介入や実践活動といった応用研究も多く、現場で活躍する指導者やプロ選手も多数参加している。学術大会そのものは3日間行われた。大会初日は、スポーツメンタルトレーニング指導士研修会とスポーツメンタルトレーニング指導士資格取得講習会、会員企画シンポジウム、2日目と3日目には、ポスター発表および口頭発表、シンポジウムや教育講演などが開催された。学会発表に関しては、口頭発表とポスター発表の2つに分類された。

著者は、筆頭著者として「大学生アスリートにおけるハーディネスとヴァルネラビリティが抑うつに及ぼす影響」、共同研究者として「大学生トライアスリートにおける心理的スキルとパフォーマンスの関連」「児童におけるスポーツ経験と社会的スキルの関連」「イップス症状をもつ高校野球選手の心理的特徴」「高校野球指導者のイップス選手への指導方法—パフォーマンスの回復がみられた指導方法の



収集—」「高校野球選手におけるイップス症状の特徴—原因論からのアプローチ—」「日本人大学生競技者の向社会的および反社会的行動の把握」という7演題を発表した。

今回の学術大会には、学内共同研究費を利用させていただき学術大会での発表を行った。研究課題名は「大学生アスリートにおける折れない心と傷つきやすい心に関する研究—ヴァルネラビリティ尺度の開発とストレスとの関連性の検討—」であった。今

\* 順天堂大学大学院スポーツ健康科学研究科 博士後期課程2年生  
Graduate School of Health and Sports Science Juntendo University

年度の研究成果として、日本応用心理学会の学術大会にて、ヴァルネラビリティの尺度開発について発表し、今回の日本スポーツ心理学会の学術大会では、折れない心（ハーディネス）との関連について発表を行った。

ヴァルネラビリティは心理学領域では比較的新しい概念であり、まだ認知されていないのが現状である。もともとヴァルネラビリティは、工学や福祉、災害の分野から提唱された概念であったが、著者は、アスリートの「傷つきやすさ」に着目し、ヴァルネラビリティを心理学の領域で初めて扱った。今回のポスター発表では、アスリートのハーディネス（折れない心）とヴァルネラビリティ（傷つきやすい心）が、抑うつにどのように影響するかを検討した研究であった。これまでの研究では、ヴァルネラビリティは抑うつとの関連が強く、傷つきやすさが高いことで、ストレス反応を呈しやすいことが明らかとなっている。そのため今回の発表では、スポーツ心理学やスポーツ健康科学を専門に研究されている研究者だけではなく、現場で悩みを抱えている指

導者や、メンタルヘルスの不調に直面しているアスリート、アスリートを対象とした精神疾患の研究をされている医療従事者といった方々が拝聴していただき、質問やアドバイスを多く頂くことができた。また、多くの研究者や指導者から興味を持っていただくことができたことから、非常に有意義な3日間であったと考える。

スポーツ心理学や健康・臨床心理学といった応用心理学の領域では、基礎研究と応用研究のどちらも重視されている。スポーツ領域では、現場への還元が重要視されていることもあり、研究者と実践者の「橋渡し」が重要である。特に、アスリートのメンタルヘルスの諸問題は、早急に解決されるべき問題であると考ええる。しかしながら、アスリートのヴァルネラビリティ研究はまだ始まったばかりである。実際の現場で悩む指導者やアスリートを1人でも多く救うために、日々の研究活動を勤しみ、1日でも早く有益な情報を現場に還元できるように努めていこうと改めて感じる機会となった。